

障害の重い子どもの 目標設定ガイド

授業における「学習到達度チェックリスト」の活用

徳永 豊 編著

はじめに

長年にわたり、障害が重度で重複している子どもの指導に取り組んできた。子どもの実態把握の際、簡便でその子どもの概要を確認するには、遠城寺式・乳幼児分析的発達検査の結果が大きな手がかりとなった。障害が重度で重複すると、独りで座ることが難しく、手指の操作も容易でない。このような子どもと活動していると、「子どもの行動の見方を教師自身がどう変えられるか」「子どもへのかかわりを、教師がどのように内省、自己観照し、改善させていくか」が重要な課題となる。そして、教員の研修や専門的な講義においてもこれらの点が強調されてきた。

しかしながら、「教師の働きかけに対して子どもが起こした行動をどのように評価するか」については、あまり検討されてきていない。さらには、子どもの実態について、教員間や保護者とで、共通理解をするための枠組みが不明確である。わずかな変化でも、目に見えるものは見える形で評価することが重要である。そうすることで、関係者で子どもの実態、目標設定、学習評価について共通理解することが可能となる。

イギリスでは、1998年に特別な教育的ニーズのある子どもの目標設定についてのガイドラインが示された。約16年が経過した現在においてもそのガイドラインによる子どもの実態把握のデータ収集が進められている。2006年のニュージーランドの実地調査に出かけた際に、障害の重度な子どもの学習評価について質問した。その際には、「ニュージーランドでもイギリスの目標設定のガイドラインを導入しなければ」との話であった。

そこで、本書で提案する「学習到達度チェックリスト」は、障害が重度であっても、教科の枠組みでつきたい力を把握し、教員や保護者、関係者で共通理解していこうとする試みである。障害が重度で重複している子どもの学習評価が可能になれば、教科等の学習に遅れのあるすべての子どもの学習評価が可能ツールとして展開できるのではないかと考えている。

これに取り組んでいる研究会、さらには本書の「ミッション・ビジョン」として、次のものを設定した。

ミッション・ビジョン

○子ども、特に障害のある子どもが、その能力や可能性を最大限に伸ばし、その子らしい「生きる力」を身につけ、その子どもなりの自立と社会参加の実現を目指す。

- 1) そのために、通常のカリキュラム構造のもと、的確な実態把握を行い、個々の教育的ニーズに応じて、学習目標や学習内容の設定を行う。
- 2) 学習状況を把握し、目標設定の妥当性を高め、関係者の共通理解を確かなものにする。そのために、「学習到達度チェックリスト」を開発する。
- 3) そうすることで、子どもの「学び」について、6年間または9年間の積み重ね、つまり「学びの履歴 (tracking progress)」を明らかとする。

まず、「教科 (Subject) の視点による尺度 (Sスケール)」とは、国語や算数などの教科の視点や観点に従い、乳幼児の発達を基礎として、それぞれの発達段階における行動で、子どもの学びの状況を把握しようとする尺度である。

また、「学習到達度チェックリスト」とは、Sスケールの考えによって構成された行動項目の一覧であり、子どもの学びの到達度を把握し、目標を設定するために活用するものである。

そして、学習到達度による学習評価は、すべての子どもにおいて、教員や関係者で共有する必要がある最低限の「軸」であり、その情報の蓄積が、その子どもの学びの進み具合、学びの軌跡、つまり「学びの履歴」となる。

つまり、障害のある子どもとの授業は、最低限の「軸」を踏まえつつ、子どもの興味・関心を重視し、柔軟に計画しなければならない。

なお、「学習到達度チェックリスト」は乳幼児の発達を手がかりに初期発達段階にある子どもの学びを整理したものである。知的な障害がある子どもの学びを前提としているが、発達や学びの段階は定型発達が基礎となっている。その意味では、障害のない1歳児、2歳児、3歳児の学びの整理でもある。保育所・幼稚園等における「遊び活動」において、適切な学習評価をす

る際にも活用可能であろう。それゆえ、保育所・幼稚園や通園施設等における活用の可能性も大きい。

本書の第1章では、学習到達度チェックリストの開発の経緯や子どもの学び、教育課程について検討した。第2章では学習到達度チェックリストの概要と特徴を取り上げ、教科と発達の視点で整理することの必要性をまとめた。第3章では、学習の到達度評価と目標設定の実際について解説し、作業シートの活用と、その記入の仕方を取り上げた。第4章では学習到達度チェックリストの活用例を取り上げ、第5章では発達段階の意義をよりよく理解するための試みを紹介している。さらに、第6章では今後の課題や新たなチャレンジについて検討した。

このガイドを活用するにあたり、「学習到達度チェックリスト」や各作業シート、および関係資料については、70ページに記載のアドレスのWebページからダウンロードして活用できる。これらについては、必要に応じてバージョンアップしていく予定である。なおWebページの掲載期間について、まずは発行から4年間の予定とし、その後に延長を検討する計画である。

平成26年9月

徳 永 豊

目 次

推薦のことは——目標設定, 学習評価を充実させるために
はじめに

■第1章	学習到達度チェックリストと子どもの学び	2
■第2章	学習到達度チェックリストの概要と特徴について —身につけたい力と発達段階の意義	10
■第3章	学習到達度チェックリストの使い方と留意点	20
■第4章	学習到達度チェックリストの活用例	30
	1. 障害が重度な子どものチェックリストの活用例	30
	2. 知的障害のある子どものチェックリストの活用例	38
	3. その他のチェックリストの活用例	46
■第5章	学習到達度チェックリストの発達段階とその意義 —より有効に活用するために	50
■第6章	チェックリストの課題, 新たなチャレンジへ	58
	Column 各スコア (1～18) での発達段階の意義	18
	用語解説	64
	引用文献・関係文献一覧	66
■	「学習到達度チェックリスト」及び各シートの使用について	70

第1章 学習到達度チェックリストと子どもの学び

筆者は、肢体不自由や知的障害のある子どもと、一緒に身体を動かすことを通して、その行動改善に取り組み、自らの実践を積み重ねてきた。国立特殊教育総合研究所（当時）に職を得て、隣接の国立久里浜養護学校（当時）で重度な知的障害と肢体不自由を重複する子どもとの授業に参加した。子どもの障害の厳しさに、行動の改善というより、どのようにやりとりを展開し、つながりを形成していくかの模索であった。子どもと一緒に身体を動かしながら、子どものわずかな身体の動きを拾い上げ、さらには子どもの注意の方向を見極め、そこにやりとりを仕組んでいく作業であった（文献21）。

このような試みを積み重ねる中で、子ども自身はどのように注意や動きをコントロールしているのか、働きかける大人にどのように気づき、受け止めているのか、自分自身についてはどうなのか、を把握することの必要性を感じた。このことを考える上で、乳児の体験世界に関する研究や共同注意関連行動、さらに近年において急成長している「赤ちゃん研究（乳児の発達研究など）」が手がかりとなった。

1. 教科の観点を活用して

発達初期の行動項目を整理しなければと考えていた時に出会ったのが、イギリスにおける障害が重度な子どもを対象とした「目標設定のガイドライン」であった（文献2）。それは、「個人的及び社会的発達（Personal and Social Development）」であり、誕生からの発達を踏まえて、「相互交渉と社会性の発達」「社会生活スキル」「注意」の区分で整理されていた。このガイドラインがその後「Pスケール」に発展していった。

このPスケールとは、知的障害が重度な子どもに対して、乳幼児の発達を

手がかりに、国語や算数など教科の視点で目標設定を行うためのガイドであった（文献19, 20）。

我が国において、子どもにとっての「生きる力」は、「学力」「人間性」「体力」とされている。つきたい力の一要素として、国語や算数などの教科の視点で検討するのは、障害の有無にかかわらず、大原則である。それにもかかわらず知的障害が重度な場合や、障害が重度で重複している場合には、原則である「聞くこと」「話すこと」など国語等の視点が活用されていない現状がある。

これまでの特別支援教育の経験を踏まえつつ、伝統的な良さを残しながら、子どもの実態把握や学習評価に、大原則である国語や算数の教科の視点を再導入することが必要とされていた。

2. 簡単・便利さを

障害が重い子どもとの授業を展開する際に、子どもの発達に関して大まかな把握が欠かせない。多くの特別支援学校（肢体不自由）の小学部等では、簡便な発達検査として「遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表」（文献4）を使っている。比較的簡単に検査でき、発達の傾向を全般的に分析し、プロフィールで把握できるので使いやすい。どの検査を選択するかは目的によるものの、詳細に把握する検査法は数多くあるが、検査しやすさや使いやすさからするとこれに勝るものはない。このような理由で、遠城寺式・乳幼児分析的発達検査は、特別支援学校で比較的幅広く活用されている。

しかしながら、これは発達検査のため「運動」「社会性」「言語」の区分となっていて、学校の教科の視点での指導とのつながりは検討されていない。授業につながる学習評価に活用するためには、項目の区分を読みかえなければならない。言語は「聞く」「話す」と対応するものの、「読む」「書く」や「数と計算」「図形」などに該当する項目はない。

つまり、遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表は簡単で便利な実態把握のツールではあるものの、そのまま授業における実態把握には使えない。

そこで、知的障害がある子どもや肢体不自由と併せて知的障害を有する子どもの学びの状況を把握し、適切な目標設定をするために「学習到達度

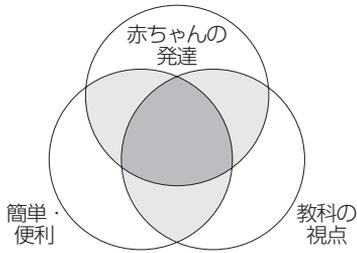


図1-1 チェックリストの特徴

チェックリスト」(以下、「チェックリスト」)を作成した。

このチェックリストは、まず筆者である徳永が2005年頃より開発に着手し、2006年に「学習評価研究会」(その後、「障害のある子どもの学習評価と授業改善の研究会」)に発展)を立ち上げ、古山勝、吉川知夫、一木薫、田中信利ら

の協力のもと、より活用度が高いものを練りあげていった。

また、学校で教育実践を展開している教員などを対象とした研究会やセミナーを開催してきた。

3. 「学習到達度チェックリスト」とは

チェックリストは、特に知的障害が重度な子どもに対応できるように、誕生から1歳6カ月までの項目を詳細に設けている。図1-1に示したように、チェックリストの特徴は、「聞く」「話す」等の「教科の視点」を重視し、初期段階である「赤ちゃんの発達」を踏まえて行動項目を列挙した。さらに簡単に活用でき便利に使えることを目指している。遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表と比較すると複雑過ぎる部分もあり、今後簡略化を進めていく必要もある。

チェックリストの基本的な構造を図1-2に示した。横軸に「聞くこと」

84							
72							
.	国語と算数の各観点で、スコア1からスコア72(小学校1年生段階)までを、12段階で整理して、子どもの学びの程度(学習到達度)を把握し、目標設定の手がかりとして、授業づくりの基本情報とする。						
.							
4							
2							
1							
スコア	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと	数と計算	量と測定	図形
	国語				算数		

図1-2 「学習到達度チェックリスト」の基本的な構造

「話すこと」「読むこと」「書くこと」の国語科、さらに「数と計算」「量と測定」「図形」の算数科が位置づけられている。さらに、縦軸が発達段階であり、生後1カ月程度に相当する「スコア1」から1歳程度に相当する「スコア12」、さらに小学校1年生に相当する「スコア72」まで各12段階と、それ以上の行動項目が位置づけられている。

4. 「学び」についての再考を

平成19年度に制度的に特殊教育から「特別支援教育」と転換された。インクルーシブ教育システムを構築する取り組みにおいて、子どもの「学び」を教育学の視点から再検討し、障害があることを理由に質の異なる「学び」としないことが求められる。つまり障害の有無にかかわらず、教員が授業において追求していくことは、子ども自身が「学び」を積み上げていくことをいかに支援していくかである。

この視点からは障害があっても身につける力の基本は、「聞く」「話す」などの国語科や物の有無から成り立つ「数と計算」などの算数科の視点であろう。これらの求められる力について、誕生からの発達を踏まえて把握し、目標設定をしていくことが重要になる。

なお、教科の視点を重視しているが、机上等で教科別の指導が必要と考えているわけではない。子ども自身が効果的に学ぶことを考え、各教科等を合わせた指導を工夫して、体験的に学ぶことが基本になる。

(徳永 豊)

5. 特別支援学校の教育課程

障害が重度な子どもの多くは、特別支援学校において教育を受け、生きる上で必要なことを学んでいる。そこでの教育は、発達の程度や障害の特性に応じてさまざまに工夫されたものである。

特別支援学校の教育課程は、小学校段階である小学部の場合、小学校の各教科等に加えて、「自立活動」で編成されている。自立活動とは、障害による学習や生活上の困難に対応する教育活動となっている（文献11）。